



Title	上田秋成と蒹葭堂
Author(s)	飯倉, 洋一
Citation	蒹葭堂だより. 2008, 8, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

よだや堂 葦 茶

一秋成と蒹葭堂の交友は三十年にわたり。とくに「茶飲み友達」として許しあつていたことは有名である（水田紀久『水の中央』にあり、木村蒹葭堂研究』岩波書店、一〇〇一年）が、今回は和学者としての交流を示す二つの消息文について述べる。いずれも文化五年刊行の秋成消息文集『文反古』上に収められているものである。

ひとつは安永四年八月と推定される和学者加藤宇万伎宛消息である。大番守力の宇万伎はこの時、大阪城番勤務。その役目を終えて江戸に帰ろうという直前に、送別の船遊びをすることになり、秋成が師の宇万伎に日程の都合を尋ねる。

（前略）一日の御暇うけ給わらばや。江に棹さゝせて遊ばせ奉らん。いさりする者もつかうまつさせて、いさゝけなりともとらせてみせたいまつるべし。細合方明・木村孔恭等、舳艤に参るべく、桂常政、御あつらへの

参加者は細合方明（半斎）、木村孔恭（蒹葭堂）そして桂常政（雨月物語）の挿絵を書いたとされる桂眉仙等である。常政は宇万伎注文の画を持ってくるという。『文反古』の冒頭、七通ほどある宇万伎関係の一連の消息のうちの一通である。蒹葭堂と宇万伎との関係は、明和九年、宇万伎が『押照浪速なる蒹葭堂のと葉』を撰んで以来である。これだけのメンバーが宇万伎送別のため一堂に会したかと思うと感慨深い。

もう一通は、蒹葭堂死秋成消息で、『文反古』上巻の巻軸に位置するもの。上巻は、宇万伎の他、小沢蘆庵、正親町三条公則・瑚璉尼・十時梅庄など、秋成にとって大切な人を

絵擧げて是もと申す。ひとくともに、猶御名残の御物がたり承るべく、船は大城の北の岸に、朝とくよりよせさせ侍るべく、ねがふは某日はいつと承らばや。けふならずとも聞えさせ給へ。

上田秋成と蒹葭堂

飯倉洋一

編集・発行

木村蒹葭堂顕彰会

平成20年11月28日

追慕する文集という側面をもつてゐる。巻頭に宇万伎関係の消息七通があり、亡き恩師を偲ぶ秋成の思が明白に表れているといえるが、卷軸に蒹葭堂を配したのは、秋成にとつて蒹葭堂が大切な友人であったことを意味しているだろう。手紙の前書によれば、浪速の友である蒹葭堂が、源順の和名抄の十巻である本を手に入れて、今広く流通している二十巻本との違いを考えるよう依頼してきた。秋成はそのころ病氣のため田舎（淡路庄）に引きこもつていたので、暇があるのでにまかせて安請け合いをしてしまつたが、一年余り怠つていたところ、蒹葭堂がはやく返却してほしいと言ひよこしてくるので、一所懸命日数を重ねて校異作業をした上でこの十巻本を返したといふ。

手紙本文の書き出しは以下のようである。

年もやう／＼暮ぬめり。家こそりてつゝみなく、春をむかへたまんこと、あかぬためしにこ

とほぎ申す。わづらひの神は、賑はしきあたりは窺はぬものか。『和名抄』の事打もおかねど、病のひまくにて、月をわたりぬる事、なめしわざにやおぼすらん。今はよろづをうちやめてつとめてん。今しばしも。「年内に」とおぼし立ぬ。

暮のあいさつとともに、遅延したことをへの丁重な詫び言が記されている。このあとは十巻本について詳細に考証している。いま秋成の結論だけ述べれば、十巻本が早く成立し、二十巻本は後人が増補したものだろうが、しかし十巻本もオリジナルとはいえない、というものである。宣長あたりがこの書を古代探求に必携のものとしていること（『玉勝問』）を受けとてであろうか。

古言をもて、古を探る人の、此書を必便として、もはら物云も、猶尽さぬか。（中略）『和名抄』のたぐひは、中古に立てて、いにしへを伝ふとおもへば、又中古の誤りを後にわたす梯ともなりて、

2008.11.28

兼葭堂だより

ひたすらにたのむべからぬこと、古書を見るにこゝろえらるゝなり。と、そこに全幅の信頼を置く危険を指摘しているのは、秋成特有の古典籍観による。この消息の年次推定、高田衛『上田秋成年譜考説』(明善堂書店、一九六四年)では寛政元年としている。秋成の病気による淡路庄退隱は天明七年のことであり、一年余り怠っていたというから、天明八年か寛政元年を当てるのが妥当だろう。天明六・七年は本居宣長と論争をしていたところもある。右の古典籍観の言表のうちには宣長の国学の方法への批判も感じられる。ちなみに兼葭堂も天明七年春には、伊勢旅行で宣長を訪問している。

さて面白いのは、秋成が兼葭堂に出した原簡に近いと思われる『文反古稿』(天理大学附属天理図書館所蔵)の当該部分には、先の冒頭部分に統いて次のような文章があるということである。

此頃の御便にせめ聞えらるゝかと見れば、あらでたゞとく返すべくうけ給はること、思ふにたがひぬれ。此ふみおのれかり求しにあらず。そなたの乞給てこゝにはもたせこされしにあらずや。

(後略)

「最近あなたの便りにて、はやくしくださいとおっしゃるのかと思つたら、そうではなくて、ただ早く返せとばかりおっしゃるのは、意外でした。この本は私の方からお願いして借りたわけではない。あなた

の方がお願いするからとここに持たせてきたのではないですか。」秋成の厭味はこのあとも続くが、これも兼葭堂と氣を許した仲なればこそその悪口であろう。とはいえ刊行の

際にはさすがに省いたのは、友人同士のその呼吸がなかなか一般の読者にはわかりにくく、誤解を招きかねないからであろう。

(大阪大学大学院教授)